

移動動詞群の意味領域と体系結合(1)

平澤 洋 一

1. 目 的

国立国語研究所資料集 14 として公刊された『分類語彙表増補版』の「2.1521 移動・発着」の 08 には「渡す, 渡る, 飛び渡る, 鳴き渡る, 行き渡る, 渡航する, 渡米する, 渡仏する, 渡欧する, 渡海する, 渡洋する, 渡河する, 渡渉・徒渉する」が, 09 には「越える, 越す, 乗り越える, 踏み越える, 飛び越える, 飛び越す, 踊り越える, 山越えする, 越境する, 峠を越える」が配置されている。これらは「類似の意味」と「意味の重なり」を有する類義語句群である。

この分類語彙表は、『分類語彙表』の増補改訂版であり, 延べ 95,811 語を分類した語彙表⁽¹⁾であるが, 語彙を「類」「部門」「中項目⁽²⁾」「分類項目」「段落⁽³⁾ (=意味上の語集団)」という 5 種の規準によってシソーラス分類し, 分類項目については「体・用・相それぞれの類の中に, ほぼ同様の分類項目を設け, 同様の配列をとった⁽⁴⁾」ので, 一つの語が複数の分野に現われる交差分類が, あちこちで見受けられる。

しかし, このような記述では, 語と語の正確な意味的距離や語彙の部分体系が分からないという欠点がある。そこで本稿では, 上記語彙の中から意味分析のサンプルとして取りだした「渡る」「渡す」「越す」「越える」の 4 語を「移動動詞群 1」と名づけ, 現代語におけるそれらの意味特徴と意味領域を明らかにして部分体系化するとともに, 他の動詞群の部分体系と結合させた場合にどのような新しい体系が生まれるかを考察する。

2. 移動動詞群 1 の意味分析

2.1 辞書の意味

1 語 1 語の意味特徴と意味領域を明らかにするための基礎作業として, まずは 4 語の意味と用法から見ていくことにする。4 語は次のような辞書の意味と用法をもつ⁽⁵⁾。

渡る: 1. 間にある海のような幅広い空間あるいは時間を経てゆく, (1)水の上を越えて向こうへ行く, (2)渡航する, 渡航して来る, 「韓国に渡る」, (3)上空を移動する, 「月渡るまで」,

(4)別の所へ移る,あるいは来る,「住む館より出でて船に乗るべき所へ渡る」, (5)ある場所を通りすぎる,橋・廊下などを通して向こうへ行く, (6)それを越して向こう側へ行く,「線路を渡る」, (7)日・時を送る,生きて行く,過ごす,「世を渡る」, 2. 一定の過程を経て一方から他方へ及ぶ, (1)昔から伝わる,「朱雀院より渡り参れる琵琶,琴」, (2)官位などが転移する,「左の大臣渡りぬ」, (3)広がり及ぶ,通じる,「この戒め,万事に渡るべし」「交渉は二日間に渡って行われた」, (4)両者の間がうまくいくように交渉する,わたりをつける,「誰に渡ってこの御寺内でもらったのだ」, (5) (人の手を経て)授かる,手に入る,人の所有となる,「土地が人手に渡る」, (6)囲碁で二つの石が盤の端の部分で連絡する, 3. 「在る」「行く」「来る」の尊敬語, 4. 他の動詞の連用形について,その動作が広い場面にわたって行われたり,時間的に長く続いたりする意を表す, (1)あまねく…する,広く及ぶ,「晴れわたる」, (2)絶えず…する, …しつづける。

渡す: (1)船・馬などを使って対岸に行きつかせる, (2)橋・梁などを一端から他端へかける,架す,「板を渡す」, (3)一方から他方へ送り移す,引き取る, (4)手から手に移す,手渡しする,相手に受け取らせる, (5)他の人のものとする, (6)罪人の身柄・首などを人目にさらして移送する,引き回す, (7)広い地域を見る,「見渡す」, (8)衆生をさとの彼岸に行きつかせる, (9)室内に通す, (10)行き届くようにする,ずっと一面に…する。

越す (自): 境界などを越えて進む, (1)行く,来る,去る,「宅へもお越し下さい」, (2)引越す,移転する,「隣町に越す」。

(他): 障害や限界をなすものなどをのりこえる, (1)ある領域にあるものを他所に渡す,越えさせる, (2)あるものの上を通過する, (3)前にあるものを抜いて先行する,追い越す, (4)時間・時節などを過ぎる,経過する, (5)障害となるものを通りすぎる,困難なところを切りぬける,「山を越す」, (6)ある標準より上に出る, …以上になる,超過する,「五十を越す」, (7)ぬきんでる,まさる,ひいでる,「それにこしたことはない」。

越 (超) える: 動作・状態がある限界を一挙に上まわる, (1)物の上を過ぎていく,障害物などをのりこえていく,「国境を越える」, (2)その時を経過する,「年越ゆるまで音もせず」, (3)ある程度 (限界) を過ぎてそれ以上となる,「定員を越える」, (4)上まわる,まさる, (5)きまりなどにそむく,規則にはずれる,「心の欲する所に従へども矩を越えず」, (6)順序を追わず進む,とびこす,追いこす,「兄を越えて弟が家を継ぐ」, (7) (主義・立場などを) 超越する,「利害の対立を越えて事に当たる」。

2.2 「渡る」と「渡す」の意味領域

上記4語の辞書的意味には現代語では使用しない意味と用法が含まれているので,それを取り除き,現代語の意味と用法について意味分析していくことにする。辞書的意味を構成する最小単

位を意味特徴と名づけると、ある語の辞書の意味は意味特徴の束として構造化できるようになる。

「渡る」は〈移動場所〉を表現する意味特徴として〈幅の広い隔絶空間ないしは時間を〉、〈状態〉のそれとして〈おおむね水平に〉という意味制限を受けるので、「川を渡る」「海を渡る」「鳥が谷を渡る」「踏切を渡る」「アメリカへ渡る」「世を渡る」とは言えても「国境を渡る」「山を渡る」とは言えない。隔絶空間には川・谷・海・大通り・交差点・世間のように、直線的水平的に向こう側に到達するまでに広い幅や距離のあるものがくる。敷居・畳の縁・プラットフォームの白線・境界線・国境などに「渡る」が使えないのは、このためである。

また、「鳥が谷を渡る」「歩道橋を渡る」「陸橋を渡る」では移動は水平とは限らないものの、起点から到達点までの距離が大きいので、顕著な上昇移動がないかぎり「渡る」が使える。塀や山といった障害物に行く手を遮られ急な上昇を求められるような移動空間となると、「渡る」の意味領域では処理できなくなり、「越す」「越える」の範疇に入ることになる。

意味特徴が抽象化されても「渡る」は使用され、「会社（の所有権）が人手に渡る」「研究（の領域）は多岐にわたる」「（期間が）数年にわたる裁判」などの使い方が可能となる。「その動作が広い範囲に及んだり時間的に長く続いたりする」という意味を有する「晴れわたる」「響きわたる」などの用法も同様である。

一方、自動詞「渡る」に対する他動詞「渡す」の辞書の意味と意味領域は、どのように対応しているのだろうか。両語はかなりうまく意味対応しており、「船で人を渡す」「船で川を渡す」「橋を渡す」「土地を人手に渡す」とはいえるが、「韓国に渡す」「線路を渡す」「世を渡す」「2日間にわたして行く」「晴れわたす」とはいえない。さらには「梁を渡す」「橋を渡す」「見渡す」は「渡す」だけの用法である。

以上のことから、現代語「渡る」「渡す」の辞書の意味と主な用例は、次のようにまとめられる。

渡る：1. 主体が障害物のない幅の広い隔絶空間をおおむね水平に通過して起点から到着点に至る、(1)幅の広い隔絶空間を経て向こう側に行きつく、「川を渡る」「韓国に渡る」、(2)主体が移動場所を辿りながら向こう側へ進む、「橋を渡る」、(3)主体が横断して向こう側に行きつく、「線路を渡る」、(4)主体が抽象的な空間・時間の中を進む、「世を渡る」、(4)権利などが相手に移る、「土地（の権利）が人手に渡る」、2. 主体や状況が一定の過程を経て一方から他方へ及ぶ、「交渉は2日間に渡って行われた」「空が晴れわたる」。

渡す：1. 主体が直接対象・直接目的に対し障害物のない幅の広い隔絶空間をおおむね水平に通過させて起点から到着点に至らせる、(1)幅の広い隔絶空間を経て向こう側に行きつかせる、「渡し舟で人を渡す」「馬を使って対岸まで荷物を渡す」、(2)主体が権利などを相手に移す、「土地（の権利）を人手に渡す」「家を明け渡す」「店を売り渡す」、(3)対象を一端から他端へ架ける、「梁を渡す」「橋を渡す」、2. 主体が一定の過程を経て一方から

他方へ広く及ぶようにする、「見渡す」。

2.3 「越す」と「越える」

『広辞苑』は前出のように「越す」の見出しを立ててから自動詞と他動詞に分けて記述しているが、本稿はこれを分けずに自他動詞1語として扱う。「越す」と「越える」の意味特徴と用法については、他の動詞群とともに論述したことがある⁽⁶⁾ので、本節では記述の重複を避け、辞書的意味と意味特徴の一部を改めるにとどめる。

越す（自他）：1. 主体が幅の広い障害物の上を通過する、「越すに越されぬ大井川」「山を越して飛ぶ」、(2)主体が到着点に達する、移転する、「隣町に越す」「こちらへ越してくる」、(3)季節などを経る、「冬を越す」、2. 限界や難所を切り抜けて進む、「車で峠を越す」「山を越す」、3. 前方に位置するものを抜いて先行する、「車を追い越す」、4. 主体が基準や限界を過ぎてそれ以上となる、(1) 超過する、上回る、「気温が30度を越す」「50を越す」「3ヵ月を越す」、(2)勝る、秀でる、「それにこしたことはない」。

越（超）える：1. 主体が障害物の上を通過する、(1)幅のない障害物の上を横断して通過する、「境界を越える」「国境を越える」「期限を越える」、(2)幅の広い障害物の上を通過する、「丘を越える」「日本海を越える」、(3)主体が横断して向こう側に行きつく、「線路を渡る」、2. 移動場所の障害や難所を切り抜けて進む、(1)上昇・下降して障害物の上を通過する、「塀を越える」「車で山を越える」、(2) 限界や難所を切り抜ける、「峠を越える」「一山越える」、3. 前や上に位置するものを飛び越して先行する、「専務を越えて社長になる」、4. 主体が基準や限界を過ぎてそれ以上となる、(1)上回る、「気温が30度を超える」「定員を超える」「ニューヨークダウが1万ドルを超える」「壮年期を越える」、(2)克服する、「利害を超えて事に当たる」。

「渡る」が〈主体が障害物のない幅の広い隔絶空間をおおむね水平に通過して起点から到着点に至る／主体が移動場所を辿りながら向こう側へ進む／主体や状況が一定の過程を経て一方から他方へ及ぶ〉ことを基本とするのに対し、「越す」は〈主体が幅のない障害物の上を通過する／主体が幅の広い障害物の上を通過する／障害や難所を切り抜けて進む／前方に位置するものを抜いて先行する／主体が基準や限界を過ぎてそれ以上となる〉ことに、また「越（超）える」では〈幅のない障害物の上を横断して通過する／障害や限界・難所を切り抜けて進む／前や上に位置する対象を飛び越して先行する／主体が基準や限界を過ぎてそれ以上となる〉ことに焦点があるという違いがある。このような意味領域の違いがあるので、一般に川の上をほぼ水平に移動するだけなら「川を渡る」、川が行く手を遮る障害物となっている場合なら「川を越す」か「川を越える」となり、移動場所が国境のように幅のないものであれば「国境を越す」「国境を越える」が選択されることになる。

「越す」と「越(超)える」の意味領域はほぼ重なっているが、(a)主体が到着点に移転する意味特徴が「越(超)える」に欠落しているため「隣町に越す」「こちらに越してくる」の用法が「越(超)える」にはない、前方に位置するものを抜いて先行するときの越え方が違うので「車を追い越す」といっても「車を追い越える」とはいえないし、基準や限界を超える用法の広狭から「利害を超えて事に当たる」といっても「利害を越して事に当たる」とはいえない、というような差が生じることになる。

3. 「移動動詞群1」の意味特徴

前節の議論をまとめると、「渡る」「渡す」「越す」「越(超)える」の意味特徴の束を次のように記述することができる⁽⁷⁾。

渡る：〈主体が〉〈起点から〉〈方向(〈目標・相手方向・向こう側へ〉)〉〈移動場所を(〈障害物のない空間を／幅の広い空間を／地上を／抽象的な空間・時間の中を〉)〉〈移動手段〉〈状態(〈おおむね水平に〉)〉〈到着点まで／に〉〈移動する(〈至る／及ぶ〉)〉

渡す：〈主体が〉〈起点から〉〈直接対象・直接目的に／を〉〈間接対象に〉〈方向(〈目標・相手方向・向こう側へ〉)〉〈移動場所を(〈障害物のない空間を／幅の広い空間を〉)〉〈移動手段〉〈状態(〈おおむね水平に〉)〉〈移動手段〉〈到着点まで／に〉〈移動する(〈至る／及ぶ〉)〉〈他動化⁽⁸⁾〉

越す：〈主体が〉〈起点から〉〈方向(〈目標・相手方向・向こう側へ／自分の方へ〉)〉〈移動場所を(〈幅のない障害物の上を／幅の広い障害物の上を／季節などを／限界や難所を〉)〉〈移動手段〉〈状態(〈上昇・下降して障害物との衝突を避けながら／前方に位置するものを抜いて／限界や難所を切り抜けて／基準や限界を上回って／勝って・秀でて〉)〉〈到着点まで／に〉〈移動する(〈至る／及ぶ〉)〉

越(超)える：〈主体が〉〈起点から〉〈方向(〈目標・相手方向・向こう側へ〉)〉〈移動場所を(〈幅のない障害物の上を／幅の広い障害物の上を／地上を／季節などを／限界や難所を〉)〉〈移動手段〉〈状態(〈上昇・下降して衝突を避けながら／前や上に位置するものを飛び越して／限界や難所を切り抜けて／基準や限界を上回って／克服して〉)〉〈到着点まで／に〉〈移動する(〈至る／及ぶ〉)〉

個々の意味特徴は、文法的意味とも深い関係性を有し、構文を構成する「格」とリンクしているものと予想される。そこで、構文内に配列されると仮定される「格」の一つ一つに位置記号をつけ、それにリンクする語彙の意味特徴にも同様の位置記号をつけると、本稿で扱った移動動詞の格および意味特徴は次のようになる⁽⁹⁾(〔 〕は文法・文体格を、／は意味特徴の選択的境界を、±は任意の選択を示す)。

表1 移動動詞群1の意味特徴

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
	A主体	B起点	B1起点	B2自分	C直接	C1通常	C2動く	C3災難	C4邪魔	D間接	E方向	E1相手	E2自分	E3内→	E4目標	E5相手	F移
1 渡る	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0
2 渡す	2	1	1	0	2	2	0	0	0	1	2	2	0	0	0	0	0
3 越す	2	1	1	1	0	0	0	0	0	0	2	1	1	0	0	0	0
4 越える	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0
1-4																	
最大	2	1	1	1	2	2	0	0	0	1	2	2	1	0	0	0	0
最小	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0
平均	2	1	1	.25	.5	.5	0	0	0	.25	2	1.75	.25	0	0	0	0
標準偏差	0	0	0	.5	1	1	0	0	0	.5	0	.5	.5	0	0	0	0
ケース数	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4

表2 移動動詞群2の意味特徴

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
	A主体	B起点	B1起点	B2自分	C直接	C1通常	C2動く	C3災難	C4邪魔	D間接	E方向	E1相手	E2自分	E3内→	E4目標	E5相手	F移
1 移す	2	1	1	0	2	2	0	0	0	0	2	1	1	1	0	0	0
2 それる	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0
3 そらす	2	1	1	0	2	2	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0
4 追いつく	2	1	1	0	2	1	1	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0
5 どく	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1
6 どける	2	1	1	0	2	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1
7 転ずる	2	1	1	0	2	1	0	1	1	1	2	1	0	0	0	0	0
8 ずれる	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0
9 ずらす	2	1	1	0	2	2	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0
10 飛び出す	2	2	1	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	1	0	0	0
11 踏み切る	2	2	1	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	1	0	0	0
12 乗り越す	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0
13 通り過ぎ	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0
14 経る	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0
15 辿る	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0
16 辿り着く	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0
17 届く	2	1	1	1	0	0	0	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0
18 もたらす	2	1	2	0	2	1	0	1	1	2	2	2	0	0	0	0	0

渡る：[+A 主体] [+B 起点] [±C 直接対象] [±D 間接対象] [+E 方向] [+F 移動場所] [±G 移動手段] [±H 程度] [+I 状態] [±J 到着点] [+K 文体] [+L 移動する] [-M 他動化]

〈+A 主体が〉〈+B 起点から〉〈-C 直接対象〉〈-D 間接対象〉〈+E 方向 (〈+E 1 目標・相手方向・向こう側へ〉)〉〈+F 移動場所を (〈+F 1 障害物のない空間を／+F 2 幅の広い空間を／-F 3 幅のない障害物の上を／±F 4 地上を／±F 5 抽象的な空間・時間の中を／-F 6 季節などを／-F 7 限界や難所を)〉〉〈±G 移動手段〉〈±H 程度 (〈±H 1 ととも／±H 2 勢いよく／±H 3 少し)〉〉〈+I 状態 (〈±I 1 他の物に沿うように／-I 2 起点の上を／-I 3 境界や対象の上を)〉)〉〈±J 到着点へ／まで〉〈+K 文体〉〈+L 移動する (〈±L 1 到達する／±L 2 及ぶ)〉〉〈-M 他動化〉

「渡る」に「渡す」「越す」「越(超)える」を加えた4語、さらに22語⁽¹⁰⁾(これを「移動動

詞群2」と名づける)を結合してサンプル数を26語に増やして、前節までの分析作業を行うことによって、次の意味特徴の束を得た。

「移動動詞群1」+「移動動詞群2」の意味特徴

〈+A 主体が〉〈±B 起点から (〈±B1 起点から/±B2 相手から〉)〉〈±C 直接対象に/を (〈±C1 動く対象を/±C2 災難などの対象を/±C3 邪魔な対象を〉)〉〈±D 間接対象に〉〈+E 方向 (〈±E1 目標・相手方向へ/±E2 自分の方へ/±E3 内から外へ/±E4 目標とは別の方向へ/±E5 相手の進行方向を塞がないよう別方向へ〉)〉〈+F 移動場所を (〈±F1 障害物のない空間を/±F2 幅の広い空間を/±F3 幅のない障害物の上を/±F4 地上を/±F5 抽象的な空間・時間の中を/±F6 季節などを/±F7 限界や難所を〉)〉〈±G 移動手段〉〈±H 程度 (〈±H1 とても/±H2 勢いよく/±H3 少し〉)〉〈+I 状態 (〈±I1 他の物に沿うように/±I2 起点の上を/±I3 境界や対象の上を/±I4 障害物を乗り越えて/±I5 時間的長さを乗り越えて/±I6 探し求めながら/±I7 迷った末に/±I8 物の上に乗って/±I9 (主体が)物理的に伸びて〉)〉〈±J 到着点へ/まで (〈±J1 目標と並ぶ点まで/±J2 目標の先まで〉)〉〈+K 文法〉〈+L 移動する (〈±L1 到達する/±L2 及ぶ〉)〉〈±M 他動化〉

4. 移動動詞群の体系化

「渡す」「越す」「越(超)える」についても「渡る」と同様の手続きを行った後、前節の意味特徴(A~M)を横に4語を縦にとって意味特徴の表を作り(その一部を表1に示す)、それをもとに本節では4語の意味的距離と部分体系などを考察していくことにする。

表1のデータをクラスター分析すると、ユークリッド平方距離による4語相互の非類似度は最高が24.00、最低が8.00であった(非類似度が低いほど両語の意味的距離は近い)。

- (a) 1 渡る/2 渡す : 16.00
- (b) 1 渡る/3 越す : 16.00
- (c) 1 渡る/4 越(超)える : 14.00
- (d) 2 渡す/3 越す : 22.00
- (e) 2 渡す/4 越(超)える : 24.00
- (f) 3 越す/4 越(超)える : 8.00

ワード法によるクラスターの結合(ステップ1~3)を行うと、非類似度⁽¹¹⁾8.00の「3 越す/4 越(超)える」、同16.00の「1 渡る/2 渡す」、同26.00の「1 渡る/3 越す」の順でクラスターができていく。クラスター結合の結果をデンドログラムで表示すると、図1のようになる。図1からは、語彙の意味による対立である「1 渡る・2 渡す」/「3 越す・4 越(超)える」の分

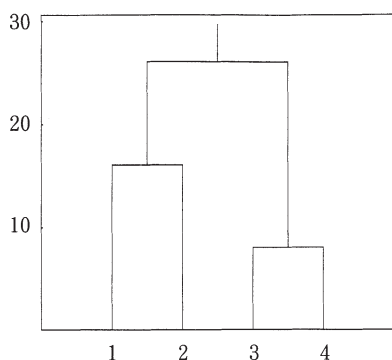


図1 移動動詞群1のデンドロ

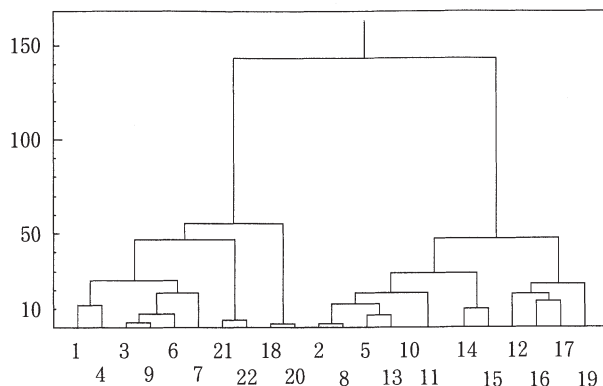


図2 移動動詞群2のデンドロ

割が、「1 渡る・3 越す・4 越（超）える」／2 渡す」という文法的意味による分割より優先して適用されていることが読み取れるし、図1では「1 渡る／2 渡す」と「3 越す・4 越（超）える」が隣に位置しているので、「類義語は一塊になって部分体系をなす」ことを予感させる。

4語と同じ手順により「移動動詞群2」22語の意味特徴の関与をまとめると表2となる。この表のデータをユークリッド平方距離を基準にして分析すると、非類似度の最低は「10 飛び出す／11 踏み切る」の0.00, 最高は「1 移す／2 それる」の142.95であり、クラスター結合（ステップ1～21）における非類似度は、こうなる。

- (1) 10 飛び出す／11 踏み切る：0.00
- (2) 2 それる／8 ずれる：2.00
- (3) 18 もたらず／20 及ぼす：2.00
- (4) 3 そらす／9 ずらす：3.00
- (5) 21 よこす／22 取り寄せる：4.00
- (6) 5 どく／13 通り過ぎる：7.00
- (7) 3 そらす／6 どける：7.67

(中略)

- (21) 1 移す／2 それる：142.95

クラスター結合の結果をデンドログラム表示すると、図2となる。このデンドログラムでは、類義語である、

- (1) 1 移す, 3 そらす, 4 追いつく, 6 どける, 7 転ずる, 9 ずらす, 18 もたらず, 20 及ぼす, 21 よこす, 22 取り寄せる
- (2) 2 それる, 5 どく, 8 ずれる, 10 飛び出す, 11 踏み切る, 13 通り過ぎる, 14 経る, 15 辿る
- (3) 12 乗り越す, 16 辿り着く, 17 届く, 19 及ぶ

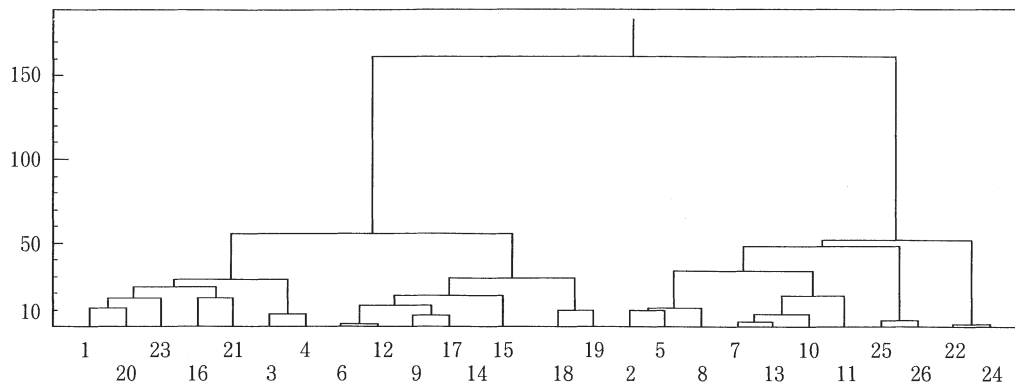


図3 移動動詞群1+2のデンドロ

がそれぞれクラスターをなして近くに配置されており、意味的距離の近い語が集まって小クラスターをなし、順次結合してより大きなクラスターを形成していていることが分かる。とくに「3 そらす, 6 どける, 9 ずらす」, 「18 もたらす, 20 及ぼす」, 「21 よこす, 22 取り寄せる」, 「2 それる, 8 ずれる」, 「10 飛び出す, 11 踏み切る」, 「14 経る, 15 辿る」, 「16 辿り着く, 17 届く, 19 及ぶ」といった類義語や近似語が同じクラスターの中に位置づけられており、部分体系として首肯できる。

5. 部分体系の結合

最後に、移動動詞群1と移動動詞群2の部分体系を結合させてみる。部分体系同士を結合した場合、それぞれの体系が歪められるのか、逆にそれぞれの語が新たにより意味的に近い相手を探しあって結合していくのであろうか。

- (1) 1 渡る, 3 越す, 4 越(超)える, 16 乗り越す, 20 辿り着く, 21 届く, 23 及ぶ
- (2) 6 それる, 9 どく, 12 ずれる, 14 飛び出す, 15 踏み切る, 17 通り過ぎる, 18 経る, 19 辿る
- (3) 2 渡す, 5 移す, 7 そらす, 8 追いつく, 10 どける, 11 転ずる, 13 ずらす
- (4) 22 もたらす, 24 及ぼす, 25 よこす, 26 取り寄せる

また、移動動詞群1の「1 渡る, 2 渡す, 3 越す, 4 越(超)える」は、他動詞群であるクラスター(3)(4)に「2 渡す」が取り込まれて部分体系をなし、残る「1 渡る, 3 越す, 4 越(超)える」はまとまってクラスター(1)の中に位置する。したがって、移動動詞群1と2が結合しても、部分体系の基本的な姿を保ちながら、意味的に近い語が新たに相手を求めてまとまりをなしていく、という性質があるといえる。

6. まとめと課題

今回の意味分析によって、4つのことが明らかになった。

- (1) 類義語は、意味的な部分体系を形成する。
- (2) 意味的に近い語彙は、クラスターをなして位置する。
- (3) 部分体系同士を結合させると、部分体系の基本的な姿を保ちながら、意味的に近い語が新たに相手を求めてまとまりをなしていく。
- (4) 自動詞語彙と他動詞語彙では意味特徴も構文構造も異なるが、総合的な意味関係を反映したデンドログラムを見るかぎりでは、辞書的意味・語彙の意味が文法的意味に優先する。

今後の課題は、いくつかの部分体系をさらに結合させて50語、100語というような大きな体系をつくらせた場合にも、それぞれの部分体系を大きく崩すことなく存在できるかどうかを検証していくことである。上記4項がどの程度の普遍性をもつかを確認しながら次稿で論じたい。

《注》

- (1) ある意味領域に属する語の集合を一般に「語彙」と呼ぶが、『分類語彙表』『分類語彙表増補版』とともに、語彙表と称しながら「足を棒にする」「足をすりこ木にする」「ぶらぶらする」のように語でないものを含んでいる。また、この語彙表は「意味」を基準にシソーラス分類したと推定されるが、明確な分類規準は記述されていない。
- (2) 中項目は増補版で試みとして設けた分類規準である。
- (3) 段落の項で「段落および段落内の語の順序は、なるべく意味・用法の広いほうから狭いほうへ配列しているが、必ずしも厳密ではない」と「まえがき」は説明するが、このような配列からは語彙の部分体系は見えてこない。
- (4) 増補版「readme.txt」の「まえがき」による。「体・用・相それぞれの類の中に、ほぼ同様の分類項目を設け」ることにより、一つの語が複数の分類項目に所属させられてしまう。例えば単独語の「上がる」は、「2.1503 終了・中止・停止」・「2.3520 応接・送迎」・「2.3700 取得」に出てくるし、複合動詞後項要素としての「-上がる」は「2.1131 連絡・所属」に浮き上がる、「2.1522 走り・飛び・流れなど」に駆け上がる・飛び上がる、「2.1540 上がり・下がり」に駆け上がる・飛び上がる、のように出てきて、交差分類となる。
- (5) ここでの記述は『広辞苑』第4版に基づく。辞書の意味の立て方は辞書によってマチマチであるが、本稿では「意味特徴の束」を取り出すための手がかりにしか扱わないので、辞書の意味の細部にわたる検討はしない。
- (6) 李穎清・平澤洋一「日本語教育における体系論的教授法」『情報文化学研究』第3号、情報文化学会、平成15年12月。
- (7) 格助詞・係助詞・副助詞は、本稿では「格」マーカーとして扱う。個々の意味特徴の中にこれらの助詞を含めて記述するのは、A・B・C…と同様に、構文内の位置と相互の意味関係を明確にするための便宜的な目的のためである。「を格」「に格」のような用語は本稿では用いない。()に入った要素は、()の直前の要素の下位選択要素としての意味特徴であることを示す。
- (8) 〈M 他動化〉とは、〈C 直接対象〉と一緒にして自動詞構文の意味特徴の束に加えることによって

他動詞文を生成させるための意味特徴。ある構文に〈M 他動化〉が常に関与的であれば他動詞文が、常に非関与的であれば自動詞文が、関与が任意であれば自他動詞文が構文形成レベルで生成される。

- (9) ただし、ここに記した格と意味特徴は、サンプル数 26 語から帰納させたものに過ぎない。今後の研究で調査語彙が増えるたびに補完されていく可能性がある。
- (10) 上記(6)に同じ。
- (11) この段階での非類似度は、ワード法を適用した後のそれである。クラスター結合を行う前の非類似度とは異なる。